

天声人語

『ドラえもん』を長く連載するなかで、バターン化しないよう気をつけていたという。ポケットから道具を出すのはいつも同じだが、感情表現に変化が出るよう、登場人物の意外な面も見せるようにと心がけていた（『藤子・F・不二雄の発想術』）▼今年は『ドラえもん』が世に出て50周年にあたる。久しぶりに本を開くと、いつも柔軟なネコ型ロボットのぞつとするような表情があった。大嫌いなネズミの出現に正気を失い、退治するために銃や「地球はかいばくだん」まで使おうとしていた▼ゆかいな話や泣ける話がある一方で、ときおり強い毒が顔を出す。この長寿マンガの魅力の一つである。地球製造セットや人間製造機などは存在 자체が怖い。いま読んで考えさせられるのは「ジーンマイク」だ▼そのマイクで声を発すると特別の音波が出て、聞く人の心を揺り動かす。おならの音にもみなが感動するというのがオチだが、どんな扇動も思いのままになりそうな道具である▼人間の感情の動きを細かに分析する研究が、いま進んでいる。近い将来、どんな楽曲が感情を揺さぶるのかが計算できるようになるかもしれない。哲学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏が近著『²¹ Lessons』で述べていた。

特定の人を心地よくする音楽が作れるなら、政治演説などにも応用できるのではないか▼すでに現代の古典といつていまマンガである。くみ取ることのできるメッセージは豊かで多岐にわたる。